

〈公募論文〉

『人倫の形而上学の基礎づけ』における二つの立場

松本 大理

はじめに

『人倫の形而上学の基礎づけ』（以下『基礎づけ』とする）第三章において、カントは人間が「二つの立場(Standpunkte)」をとり得ることを論じている。すなわち感性界の成員としての立場と悟性界の成員としての立場である。この論点は、定言命法の可能性を基礎づける議論の中で提出されており、道徳法則のもとにある自由な意志と、定言命法のもとにある義務づけられた意志との関係を説明する論拠を与えている。その議論の特徴は、理論的な認識の枠組みから出発して実践的な主張や意志に関する言明へと移行を行うところにあるが¹、しかしながら、そうした移行の諸段階のうち、どこに決定的な転換点が存するかについては、一義的に特定することは難しい。とはいえ「立場」という表現が、議論上何らかの重要な役割を担っていることは指摘し得る²。

そこで本稿では、「立場」という表現の導入に着目し、議論上の役割と含意を明らかにしたい。最初にこの表現が導入される文脈を確認し(1節)、次に「自己を〜として考える／見なす」という類似表現との比較を通して「立場」という語の実践的な含意を明確にする(2節、3節)。その上で、二つの立場の内容(4節)と相互の関係(5節)について検討する。最後に、本稿の考察から得られる問題の広がりについて若干の補足をする。

1. 議論の確認

自由の理念と道徳法則に関する客観的実在性や妥当性をめぐる論証は、互いに循環関係にある。カントによれば、そこから抜け出す方途として残されていることは、「われわれが自分を自由によってアプリアリに作用する原因として考える場合には、われわれは、眼前に見ている作用結果としての自分の行為に即してわれわれ自身を表象する場合とは、別の立場をとっているのではな

1 思考の自由から行為の自由へ(Schönecker 1999: 295)、あるいはたんに自由であることから「意志」を持つことへ(Allison 2011: 324-330)、といった移行である。これらはラオシャーが言うところの「スタンダード・アプローチ」(Rauscher 2009: 204-205)である。

2 実際、議論の方向を変更した『実践理性批判』においては、この「立場」に関する直接的な論述は見られなくなる。悟性界や純粋実践理性の使用の実在性が「事実」として位置づけられたことにより、『基礎づけ』のように理論的な文脈から「立場」の導入を通して実践的な文脈へ向かう必要がなくなったと解釈することもできるだろう。

いか」(GMS. 450)、と問うことである。その「別の立場」を根拠づける議論は次のように展開される。

まず指摘されることは、「われわれの選択意志が働くことなく生じてくるあらゆる表象」は、「われわれを触発する仕方でのみ対象をわれわれに認識させる」ということ、それゆえ「対象それ自体が何であろうかは、われわれには知られないままである」、ということである。そして、「われわれにどこか他から与えられる表象」と「われわれがもつばらわれわれ自身から生み出す表象」とが異なることから、現象の背後に、「現象ではない何か別のもの」、すなわち「物自体」を想定することが導かれ、感性界と悟性界の区別が指摘される(GMS. 451)。

こうした区別は内的感覚による自己自身についての知識においても成り立つのであり、自己自身をたんなる知覚と感覚的受容性に関しては感性界に属すものと見なし、純粋な活動性に関しては悟性界に属すものと見なすことになる(ibid.)。ここに指摘された純粋な活動性とは「理性」の活動性に他ならず、これは、感性的表象を統一する働きとしての悟性の活動性とも異なり、理念のもとで「純粋な自発性」を示すものである(GMS. 452)。

こうした確認を経て、「二つの立場」に関して、カントは次のように述べる。

「したがって理性的存在者は自己自身を(下位の能力の面ではなくて)叡知^レとして^レは、感性界にではなく悟性界に属すものとして見なさなければならない。それゆえ理性的存在者は二つの立場を持ち、そこから自己自身を考察し、自分の能力を使用する法則を、したがって自分のあらゆる行為の法則を、認識することができる。つまり第一に、感性界に属すかぎりでは自然法則のもとにあり(他律)、第二に、叡知界に属すものとしては、自然から独立した、経験的ではない、理性にのみ基づく法則のもとにあると考察することができる。」(GMS. 452)

このように、先に「別の立場」(GMS. 450)と指摘されていた立場は、悟性界に属すものとしての立場であることが確認される。こうして、議論の出発点であった自由の理念と道徳法則の妥当性をめぐる循環関係は、一応の説明に至る。すなわち、われわれは自由な存在者としては悟性界に属し、道徳法則に義務づけられたものとしては同時に感性界に属すものとして自己自身を見ている、というわけである。

さて、以上が二つの立場が明示される議論の概要であるが、この二つの立場や二つの世界に関しては、続くテキスト箇所においても繰り返し言及されており、現象としての「人間」と叡知としての「本来の自己」という存在論的な指摘も展開される。もちろん、叡知的なものに関しては、その客観的実在性を最終的に証明できない、というのが『基礎づけ』の見解であり(GMS. 455ff)、その意味では「立場」という表現は、叡知としての自己の暫定的性格を表現しているとも見られる³。しかしそれとは別に、「立場」という表現は、存在者(Wesen)でもなければ世界でもなく、場所や状態や方向性を含む独特な表現でもある。次節以下でその含意を明確にしよう。

3 たとえば、本稿第5節で検討する、「悟性界の概念は、……一つの立場にすぎない(nur ein Standpunkt)」(GMS. 458)という表現のうちに、形而上学的な語り方を防ごうとしている意図を読み取ること(Allison 2011: 355)もできるだろう。

2. 「～として考える」ことと「～という立場をとる」ことの違い

上記の議論の概要からも確認できるように、「立場」という言葉は、「自己を」感性界や悟性界に属するもの「として見なし」たり「考え」たりすることの言い換えとして導入されている(GMS. 452)。しかしこの言い換えにはいくつかの転換が含まれているため、それを明らかにすることが必要である。

まず言葉遣いを確認しておく、カントは「自己を～として見なす(ansehen)」(GMS. 452)という表現を固定して用いているわけではなく、類似したさまざまな表現を用いている。「自己を～として」という共通部分を含みながら、「考察する(betrachten)」(GMS. 452f, 455, 457)、「考える(denken)」(GMS. 450, 457)、「数え入れる(zählen)」(GMS. 451, 453)、「意識している(bewußt sein)」(GMS. 453)という表現や、また感性界の成員を特に指摘する場合には、「表象する(vorstellen)」(GMS. 450, 457)や「直観する(anschauen)」(GMS. 454)という表現も用いている。分析にあたってはどの言葉を手がかりにしてもよいわけだが、感性界の成員にも悟性界の成員にも当てはめやすく、また「として」という語とのつながりのよさから、以下では「として考える」という表現を代表させて論を進める。

さて、「自己を～として考える」という表現から「～という(～の)立場をとる(Standpunkt einnehmen/haben)」(GMS. 450/452)という表現への移行が行われるのは、両者が類似した内容を表しているからである。実際、自己を何かとして「考える」際には、そのような何かとしての「立場をとる」ことを意味しているように思われる。たとえば、自己(自分)を教員として考えることは、教員の立場をとることである、というようにである。もちろん教員でなかった場合は、「教員として考える」ことは想像にすぎないが、その場合は「教員の立場をとる」ことも、同じように想像したことを表現しているにすぎない。このように両者の言葉の振る舞いは似ており、表現上交換可能に見える。

しかし、二つの表現がこのような対応関係を示すのは、「自己」について考えている場面だからである。「自己を」という部分を「他者」に置き換えるならば、この対応関係は成り立たなくなる。すなわち、私が「他者を」教員として「考えた」としても、その他者が教員の「立場をとる」ことに対応するわけではないであろう。他者が教員の立場をとることに対応するのは、他者が「他者自身を」教員として考える場合である。

この違いを明瞭にするために一般化するならば、二つの表現は次のように分析できる。①「自己を～として考える」ことは、「S(主体)がO(対象)をC(表現内容)として考える」という関係を持っており、それは対象Oへの指示を含み、その対象Oが「自己」である場合の表現となっている。これに対して、②「～という立場をとる」ことは、「S(主体)がC(表現内容)という立場をとる」ことであり、対象Oへの指示はない。両者のこうした違いは、表現内容Cの働き方の違いにつながっている。前者(①)の場合、表現内容Cは対象Oの言い換えとして働くが、後者(②)の場合、表現内容Cは主体Sの言い換えとして働く。それゆえ二つの表現は、対象についての言及と、主体についての言及という仕方、対極的な性格を持っているのである。

そうすると、二つの表現の持つ広がりや枠組みが、そもそも異なっていることがわかる。Cという内容がO(対象)と結びつくことが重要な場合(①)、すなわちO(対象)をCとして「考える」

場合、考える主体Sが私以外の別の主体であったとしても、OとCの関係は維持され得るため、私の役割は不可欠でなくなる。たとえばマリアを教員として考える場合、私ではなく他者(たとえばトム)が考えることによって、マリアと教員との結びつきは確保される。誰かが私と同じように考えていればマリアと教員の結びつきは確保されるのであって、私による確認が不可欠なわけではない。対象が私自身である場合にも、この構造は内在している。私という対象と教員という内容の結びつきを考えることだけが重要であるならば、考える主体は私であっても別の他者であってもよい。それどころか、他者もまた同じように考えるならば、対象と内容の結びつきは強化されることだろう。

これに対して、Cという内容がS(主体)と結びつくことが重要な場合(②)、すなわち主体SがCという「立場をとる」場合は、主体が誰であるかが重要である。マリアが教員という立場をとるとき、私もトムもその結びつきを強めることには役立たない。たまたま私もトムも教員だったとしても、マリアの教員としての立場が強められるわけではない。私が教員という立場をとる場合も同様であり、他者はそれを代わることはできない。

こうした違いが「考える」と「立場をとる」との間にはある。「考える」場合は、私と他者是对称的だが、「立場をとる」場合は、非対称的である。この違いが見えにくくなるのは、「自己」を問題にしているからである。別の人物についてであれば区別できる表現的特徴が、対象が主体自身と同じであることにより、見えにくくなっているのである。また、Cの内容が「教員」のような特殊例ではなく、感性界の成員や悟性界の成員というように、すべての人に当てはまる特徴が扱われていることも、「考える」と「立場をとる」との意味の違いを見えにくくしている要因である。

確認しておくべきことは、「自己を～として考える」ことから「～という立場をとる」ことへの移行は、たんなる言葉の言い換えにとどまるものではなく、自己を「対象」として語っていた枠組みから「主体」自身を表現する枠組みへの変換がなされていたという点である⁴。カントの議論はこうした変換を利用して、理論的な認識の文脈から実践的な行為の文脈への移行を行っている。とはいえ、「対象」について語る表現から「主体」について語る表現への転換を指摘しただけでは、まだ実践的な意味の由来の説明にはなっていない。次節ではさらに掘り下げ、実践的な含意について見ておこう。

3. 理論的な「～として考える」と実践的な「～という立場をとる」こと

カントの議論は、現象と物自体を区別する理論的な認識の問題から出発し、考察の対象を「自己」へと限定する道筋をとっていた。現象と物自体の区別は他の事物や他者に対しても成り立つにもかかわらず、考察の対象を自己にのみ絞るのは、自己のうちにある理性の純粋な活動性を考察の手がかりにするためである。その道筋は、理論的認識における理性の純粋な自発性から意志という行為能力の自由へ、そして意志を規定する実践理性の働きへ、という仕方で理性の能力の

4 そのため前節に引用した箇所(GMS. 452)も、二つの世界の成員という「表現内容」が、「そこから(dar-aus)」「立場」と「自己自身を(sich selbst)」「考察対象」の両方に結びつき得るような、文法上の多義性を許す表現となっている。

内容変化を追跡するものであろう⁵。

しかしこうした自己の能力を分析する方法は、諸能力が実践的な意味を持ち始める段階(したがって「立場」という語の導入段階)が特定しにくく、また自己以外の事物との違いや他者との関係が見えにくくなるという難点を持つ⁶。そこで本稿では、諸能力の意味変化を追跡する道筋を避け、むしろ「考える」ことと「立場をとる」ことにおける「他者」のかかわり方に着目することで、出発点(理論的な認識対象)と到達点(実践的な行為主体)の違いを明瞭にする道筋を取ろう。すなわち、誰の自己か、誰が考えるのか、といった側面に焦点を当てながら論を進めよう。

前節で見たように、対象Oを内容Cとして「考える」場合は、考える主体Sが私以外の別の主体であったとしても、OとCの関係は維持され得るため、私の役割は決定的ではなかった。このことは、対象Oが「自己」の場合においても基本的に言える。私が感性界や悟性界の成員であることは、私だけによって考え得ることではなく、たとえ異なる仕方を含んでいるとはいえ、他者によっても考え得ることではなければならない⁷。それゆえ、「自己を～として考える」という表現は、私だけではなく他者もまた私についてそのように考えることができることを含んだ表現である。もちろん、同様のことは、私が他者の自己を考える場合にも指摘できるのであり、私が自己について感性界や悟性界の成員として考えることができるように、他者についてもまた(理性を持つ存在者であるならばなおさら)感性界や悟性界の成員として、私は考えることができる⁸。

こうした指摘がそもそも成り立つのは、出発点の理論的な事物認識を堅持し、「与えられたもの」を認識の対象にして、それについて「考える」、という関係から論じていることによる。「与えられたもの」であるかぎり、その対象は、私にのみ与えられるわけではなく(たとえ私にしか意識できないものはいくらでもあるにせよ)、第一義的には「与えられ」ており、他の誰かに対しても与えられていることが前提となっているからである。

この「与えられる」という関係とは異なる仕方でも考察する場合、問題は大きく変わってくる。「自己」を与えられたものとしてではなく、行為の対象として扱う場合がそれにあたる。たとえば「自己を座らせる(sich setzen)」という行為の場合、私が自己(自分)を座らせることは、他者が私を座らせることとはまったく異なるし、私が他者を座らせることとも異なる。そしてまた他者が他者自身を座らせることとも異なる。私が座ることは、私にしかなし得ず、他者が座ることは、私には代替できない。与えられたものとしての「自己(私)」の場合は他者にも与えられており、私も他者も共通した仕方(すなわち「与えられた」という仕方)でそれについて「考える」ことができるが、しかし「自己(私)」を座らせる場合は、私と他者が共通の仕方(座らせる)ではできない。行為においては誰かが誰かに対するという、多くの人に与えられることは別の情報が、

5 例えばプラウスの試み(Prauss 1983)やシェーネカーの分析がこの道筋の再構成にあたる(Schönecker 1999: 295ff.)。

6 理性の自発性は私(自己)の理性にも他者の理性にも備わる性質であり、混同するおそれがある。

7 注意すべきだが、事物認識の場合にも、私だけがその認識作用を意識し得る点では、やはり他人と「異なる仕方」がそこにある。したがって、「自己」について考える場合にのみ「異なる仕方」となるわけではない。また、「自己」を考える主体を私だけに限定することは、考察を反省的なアプローチに限定することを意味している。

8 後のテキスト箇所から指摘しておく、これは思弁哲学における人間の把握の仕方である(GMS. 456)。またその後続箇所では実践哲学における人間の把握の仕方への転換がなされ、人間の意志、自分の意志、そして本来の自己についての言及がなされる(GMS. 457)。

重要な働きをなしている。

「立場をとる」ということも、こうした意味と結びついている。「立場をとる」ことは、与えられた自己が何らかの立場にある、という理論的に認識できる事柄を表現しているわけではない。「座る」ことと同様に、「立場をとる」ことも、その人の行為であり、他者が代替できないことである。私がある立場をとることは、他者が私にそのようにさせることとは異なるし、私が他者にそうさせることとも異なる。

「自己を～として考える」と「～という立場をとる」との間のこうした違いは、要するに、理論的な理性使用と実践的な理性使用との違いに対応している。『実践理性批判』において述べられているように、理論的認識が、何らかの仕方でも外から「与えられ」得るような対象の性質についての認識であるのに対し、実践的認識は、「対象自身の現存の根拠となり得る」ような認識である(KpV. 46)。「自己を～として考える」ことは、「与えられたもの」について考えることであるのに対して、「～という立場をとる」ことは、「～という状態」を「現存させる」ことであり、これらはそれぞれ理論的なものと実践的なものに対応している。

もちろんこうした特徴づけは、「自己を～として考える」ことを、「与えられた」対象についての(理論的な)表現として狭く扱うという代償を伴っている。自己の与えられ方は、私にとっては特別な与えられ方をしている、という指摘も成り立つかもしれない。しかしその場合は、「自己を～として考える」ときの、「考える」という働きを、きわめて実践的な遂行として指摘することになる。それは、与えられた対象を理論的に観察するようにして考えるのではなく、思索したり、吟味したり、推断したりして、「考える」行為を実践的に遂行している場合であろう。そのような遂行的な仕方でも「自己を～として考える」場合であれば、それは他者について考えることとは異なるであろうし、他者が代わりに考えることもできないような「行為」であろう。その意味では、カントの議論は「自己を～として考える」ことの理論的な側面から実践的な側面へ、そして後者の側面から実践的な「立場をとる」という表現へと移行していた、と理解することも可能だろう⁹。

4. 二つの立場と実践的な二つの世界

以上のように、「立場」という表現の導入は、実践的な文脈への転換を含意していたことがわかる。ところで、「立場」には、「二つの立場」がある。それぞれ感性界と悟性界の「二つの世界」に対応しているが¹⁰、どちらの「立場」も実践的な含意を持った表現として捉えるべきであろう¹¹。しば

9 カントは二つの「立場」に関連して「(自己を)置き移す(sich versetzen)」(GMS. 453ff.)という表現を用いている。その置き移しがいかんにして可能かは説明されていないが、この表現によって、「考える」場合のようなたんなるアスペクトの転換ではなく、主体的な行為としての転換(置き移し)が示されていると言える。

10 場合によってはこの対応関係が見えにくい記述がカントのうちに見いだされるとしても(GMS. 453)、そうである。なぜなら、表現内容Cを介して、対象Oの「世界」と主体Sの「立場」が対応づけられているからである。

11 これに対して感性界を理論的立場、悟性界を実践的立場、と単純に割り振る理解も一般的である。しかしその意味は非常に曖昧であり、また並列的に考察しすぎているという難点がある(McCarty 2009: Chap. 5の指摘と議論を参照)。感性界の「立場」を理論的と呼び得るとしても、実践的な理性使用の他律を意味するのであって、理論的な理性使用の立場のことではないであろう。いずれにしても、そもそも「立場」と

しば見落とされがちだが、理論的な認識の場面で二つの世界が語られている場合と、実践的な場面で二つの立場や二つの世界が語られている場合では、意味内容が異なっている¹²。もともと理論的な意味で語られていた二つの世界は、実践的な含意を持った「立場」の導入とともに、実践的な意味で語り直されている。本節ではその点について確認し、次節において二つの立場の相互関係を検討することにしよう。

理論的な認識の場面では、感性界と悟性界は、同一の「与えられた」事物や出来事を、それぞれ現象と物自体という二つの側面から捉えることに対応している。ある人の行動という出来事であれば、一方ではそれを自然法則に従って生起した現象の系列として、感性界に属す出来事と見なすことができ、他方では、その同じ出来事について、自然法則に依拠せず自ら生起した、悟性界のうちに原因を持つ出来事として考えることができる。このことは自己について考える場合でも同じであり、「与えられた」自己や自己の行為を、一方では自然法則に従った感性界に属すものとして、他方ではそうした自然法則から独立した、悟性界に属すものとして、「考える」ことができる。

これが「立場をとる」という仕方で語り直される場合には、「与えられた」対象や出来事は、むしろそれらを「現存させる」、という実践的な文脈から語り直されることになる。すなわち、感性界に属す立場からは、自然法則に従って生起した(与えられた)出来事を、傾向性に依拠した意志による行為(他律的な意志による行為)として表象しなおすことになる。そして他方で、悟性界に属す立場からは、自然法則から独立に生起したと想定されていた活動を、理性によってのみ規定された意志による行為(自律的な意志による行為)として考えることになる。したがって、感性界は、傾向性に依拠した意志が働くことで行為が行われる世界として¹³、悟性界は、端的に善い意志が働くことで行為が行われる世界として、それぞれ実践的な意味で捉え直される¹⁴。このように「二つの立場」の導入は、理論的な意味とは異なった、実践的な意味での感性界と実践的な意味での悟性界を語るための転換点をなしていると言えよう¹⁵。

補足しておくが、理論的に語られていた行為の出来事は、単純に実践的に表現し直すことができるわけではなく、そこではある種の対比関係が壊れることになる。理論的な認識においては一つの出来事について二つの捉え方がなされていたが、実践的な認識においては、二つ立場は二つのそれぞれ異なる事柄を指示するからである。他律的な行為の世界と自律的な行為の世界は、一つの実践的行為が属す二つの世界ではなく、二つの異なる行為がそれぞれ属す世界である。もち

「世界」の意味上の違いを明確にしたうえでなければ、本来こうした問題は論じることができない。立場について論じている多くの論考が、「立場」という表現自身についてはさほど関心を払っていない。

12 ティンマーマンが指摘するように(Timmermann 2007: 133, note 30)、アリソンの「二つのアスペクト」は、ただちには「二つの立場」という問題に接続するわけではない。

13 この意味で、感性界の立場も実践的で主体的な立場の一つと見なすことができる。ただしそれは傾向性に依拠した主体であって、純粋な意志の主体ではない。

14 本稿では二つの世界が理論的な含意と実践的な含意を持つという解釈をとったが、同種の問題意識から、フリーソンは立場の側を二段階に分ける解釈を試みている(Frieson 2010: 87-94)。ただしフリーソンの「立場」理解は、結局のところ「～として考える」という意味しか含んでいないため、二つの世界についての二段階の捉え方を指摘しているにすぎない。したがってその段階づけも、本稿の整理と異なる。

15 実践的な意味における感性界としては、「模型的自然(natura ectypa)」(KpV. 43)の検討も必要だが、説明の複雑さを避けるために、ここでは考察から外している。

ろん、他律的な行為と自律的な行為は相互に異なるとはいえ、行為主体や行為状況は共通しているであろうから、たとえば義務にたんに適合した行為と義務に基づいた行為のように、立場は異なるが外的行為としては同じである場合を指摘できるかもしれない。その場合、一つの出来事について二つの捉え方をする理論的な認識と、事態が似てくると言えよう。しかしながら、一つの外的行為に二つの側面があることと、異なる(意志による)行為が結果的に同じ外的行為であることは、決して同じ事柄ではない。実践的な行為は、意志のあり方によって評価されるものであり、意志のあり方が異なれば、それは異なる実践的行為である¹⁶。

5. 二つの立場に関する根拠づけテーゼ

さて、二つの立場は異なる実践的世界を切り開くが、しかし、二つの立場は対称的な仕方で並列するわけではなく、序列関係にある。このことは、「悟性界は感性界の根拠を含む」(GMS. 453)という、いわゆる二つの世界に関する「根拠づけテーゼ」¹⁷からも予想される。「立場」に関して同趣旨の内容を読み取ることができる論述箇所は、『基礎づけ』において「立場」の言及が最後になされる箇所、すなわち、「悟性界の概念は、理性が自己自身を実践的に考えるために、現象の外にとらなければならない一つの立場にすぎない」(GMS. 458)、という箇所であろう。ここからは、理性がそもそも実践的であるのは悟性界の立場においてであること、そしてその意味では、感性界の立場も実践的な含意を持つためには悟性界の立場を根底に持つ、という関係を潜在的に読み取ることができる。

そこで問題となるのは、悟性界の立場からの理性使用が感性界の立場からの理性使用の根底にあることの意味であるが、これは文脈上、「実在性」の問題にかかわっている。当該箇所は、「いかにして純粹理性は実践的であることができるか」(GMS. 458f.)、という純粹実践理性の「実在性」を問う文脈にあり、悟性界の立場の実在性が問題となっているからである。ただしその実在性は、実践的な意味であって、理論的な意味ではない¹⁸。

理論的な理性使用の場合、その実在性の根拠は与えられた対象の経験にあり、経験を伴わずに使用されたときには思惟可能性しか得られない。理論的な認識対象の実在性は、感性的に「与えられる」ことにかかっているのであり、その意味で、理論的な実在性に関しては感性界が悟性界よりも先立つ。これに対し、実践的な認識は、「対象自身の現存の根拠となり得る」ような認識(KpV. 46)であり、したがって対象の現存を「与える」認識である。この認識の実在性は、「与えられる」ことのうちにあるわけではなく、むしろ「与える」という働きにおいて示される。その意味では、ただ与えるだけであるときにこそ、実践理性の実在性が端的に示されることになる。も

16 同種のまとめ方として寺田(1997: 57)の指摘を参照。

17 Cf. Watkins 2005: 325; Frieson 2010: 84, 94. シェーネカーは「存在倫理原則」と呼んでいる(Schönecker 1999: 371)。

18 「実践的な意味における客観的実在性」については、『実践理性批判』において明確に言及されるようになり、われわれの意志や理性がそれを「与える」という関係が提示されるようになる(cf. KpV. 44, 47f.)。『基礎づけ』ではこの点がまだ未分化であり、観知的なものの実在性を証明することはできない、という主張にとどまっている。

し理性の実践的使用が、他律的な意志規定のように「外から与えられたもの」に依拠してなされる場合は、理性の実践的な「与える」働きは限定的にしか示されない。そのような他律的な理性使用がたんなる理論的使用ではなく、実践的な使用として成り立つためには、実践的な「与える」働きを根底において持つことが必要である。それは、純粹実践理性が示す働きを根底において必要とする、ということに他ならない。したがって、感性界の立場も悟性界の立場も、どちらも対象の実在性を与える実践的な立場という性格を持つであろうが、しかしその働きの源泉は悟性界の立場の側にある。

もちろんこのことは、他律的な意志規定が自律的な意志規定によって可能になるという意味ではない。それは端的に矛盾している。そうではなく、他律的な意志が実践的であるための根拠は、当の意志が自律的であることもできるということのうちにあり、そしてもしこの根拠がなければ他律的意志は、与えられたものを欲求して反応するだけの、たんなる自然の他律¹⁹に解消してしまう、という意味である。こうした意味において、悟性界の立場は、理性がそもそも実践的であるための立場であり、そしてまた感性界においても理性が実践的に働くための根拠もなしているであろう。ここには、二つの立場の間の「根拠づけテーゼ」と呼ぶべき関係が成り立っているとと言える。

さて、こうした二つの立場の序列関係は、「立場」という言葉がもともと持っていた実践的性格にも影響を及ぼす。二つの立場は、もはや実践的な意味を等しく持つとは言えないであろうし、またそれと共に、「立場」という含意を等しく持つとも言えないであろう。本来の意味で「立場」と呼び得る立場と、それに依拠して「立場」と呼び得る立場、という違いを認めなくてはならないだろう。悟性界の立場の場合、それは実践的に対象の現存を与える働きを担う立場であり、このことはその立場に立つ主体によってしかなし得ない。したがってそれは、主体が他者と代替不可能な仕方、自ら理性を実践的に使用する立場であり、その意味で、「本来の自己」(GMS. 457f.)の立場と呼び得るであろう。そこでは「立場」という言葉の実践的な意味が根本的に表現されていると言えるだろう。これに対し、感性界の立場からなされる行為の場合、それは外から与えられたもののためになされる行為にすぎない。そのかぎり、別の主体が別の立場から代わりにその目的を実現したときには、私の行為の実行は不要になる。そのかぎり、感性界の立場は他者の立場との代替可能性にさらされている立場と言える。その代替可能性を退け得るとすれば、それは、ある目的の実現という側面から主体の立場を理解するのではなく、立場をとることそのものの実践的な側面から理解することによってであろう。それは根本的には、悟性界の立場を同時にとることでもできる主体として理解することであろう。こうした序列関係が二つの立場の間にはある。カントは一見、感性界の立場を理論的な認識を行う立場に、悟性界の立場を実践的な認識を行う立場に対応づけているように見えるが、そうした見かけはこうした序列関係に由来していると言えるだろう。

19 アリソンの言う「他律2」であり(Allison 2011: 288)、意志の他律という意味での「他律1」と区別される。寺田(1997: 57)も参照。

おわりに

本稿は「立場」のうちに実践哲学の独自性が示されていることを指摘したが、この分析の意義と広がりについて最後に触れておきたい。理論哲学と実践哲学は観察と行為にかかわるが、本稿が分析したように、「～として考える」こと(観察・考察)と「～という立場をとる」こと(行為)には、主体の共同性と個別性の違いも内在している。すなわち理論哲学は、他者と代替可能な仕方で対象観察することにかかわるが、実践哲学は、他者と代替不可能な仕方で行為を意志することにかかわる。このことは、(しばしば忘れられがちだが)理論哲学と実践哲学における他者問題の生じ方が質的に異なることを意味するとともに、「他者の立場をとる」(『判断力批判』)ことが二つの哲学の領域をつなぐ重要な役割を果たすことも示唆している。

また「立場」という用語の明瞭化により、「見地(意図)」(Absicht, Beziehung, Rücksicht など)という表現との違いも指摘し得る。「立場」が実践的な意味を持ち、かつ個々の理性的存在者に即して用いられる傾向があるのに対して、「見地(意図)」は、「理論的見地」としても「実践的見地」としても語られ、かつ一般化された仕方で、理性を念頭に置いて語られる傾向がある。こうした違いは無視できることも多いが、場合によっては混乱の源泉ともなる。例えばダーウォル(Darwall 2006)の「二人称的観点(standpoint)」の倫理学やそのカント解釈は、人称性の違いに着目するが、「観点」そのものの含意は分析し切れていないため、議論に曖昧さを残している。「観点」の意味を整理・再構成することにより、そのカント解釈の意義はいっそう高まるだろう。

引用文献

カントの『人倫の形而上学の基礎づけ』と『実践理性批判』からの引用は、それぞれGMSとKpVという略号を用いた上で、アカデミー版全集のページ数を記している。

- Allison, Henry E. (2011), *Kant's Groundwork for the Metaphysics of Morals: A Commentary*, Oxford: Oxford University Press.
- Darwall, Stephen (2006), *The Second-Person Standpoint: Morality, Respect, and Accountability*, Cambridge/London: Harvard University Press. (S・ダーウォル『二人称的観点の倫理学』、寺田俊郎監訳、法政大学出版社、2017年)
- Frieson, Patrick (2010), "Two Standpoints and the Problem of Moral Anthropology", in *Kant's Moral Metaphysics: God, Freedom, and Immortality*, ed. by B. J. B. Lipscomb and J. Krueger, Berlin/New York: Walter de Gruyter, pp. 83-110.
- McCarty, Richard (2009), *Kant's Theory of Action*, Oxford: Oxford University Press.
- Prauss, Gerold (1983), *Kant über Freiheit als Autonomie*, Frankfurt am Main: Vittorio Klostermann.
- Rauscher, Frederick (2009), "Freedom and reason in *Groundwork* III", in *Kant's Groundwork of the Metaphysics of Morals: A Critical Guide*, ed. by J. Timmermann, Cambridge: Cambridge University Press, pp. 203-223.
- Schönecker, Dieter (1999), *Kant: Grundlegung III: Die Deduktion des kategorischen Imperativs*, Freiburg/München: Verlag Karl Alber.
- Timmermann, Jens (2007), *Kant's Groundwork of the Metaphysics of Morals: A Commentary*, Cambridge: Cambridge University Press.

Watkins, Eric (2005), *Kant and the Metaphysics of Causality*, New York: Cambridge University Press.

寺田俊郎 (1997)「カント実践哲学における「自律」と「自由」」、カント研究会編『自由と行為』、現代カント研究6、
晃洋書房、50-72頁。

* 本研究はJSPS科研費 JP18K00030の助成を受けたものです。